

なまなましい生きた人間の探究がフッサール哲学の真髄

大分工業高等専門学校 一般科文系 教授 堀 栄造 (ほり・えいぞう)

専門：西洋哲学。現象学(現代ドイツ哲学)。



▲研究室にて堀栄造先生。

●西洋哲学とはどういうものでしょう？

日本の哲学教育は、明治時代に欧米に追いつけ追い越せということで始まりました。哲学というと西洋哲学になるのは、そのような背景があるからです。

西洋哲学の流れは、大まかには次のようになります。古代ギリシアで、プラトン(理想主義の源流)とアリストテレス(現実主義の源流)が登場します。中世では、アウグスチヌスがプラトン派、トマス・アクィナスがアリストテレス派です。近代では、イギリス経験論とヨーロッパ大陸合理論の二大潮流となります。前者の代表的な人物には、ベーコン、ホブズ、ロックらがいます。彼らは、アリストテレスの流れを汲む学派で、データを集めて法則を発見する帰納法という方法を取ります。後者の代表的な人物には、デカルト、スピノザ、ライプニッツがいます。彼らは、プラトンの流れを汲む学派で、理性的に推論する演繹法という方法を取ります。この対照的な二つの考え方を統合したのが、カントです。彼は、人が対象を認識する際に経験に先立って(アプリアリ)感性・悟性・理性という認識の形式があることを提示しました。その後、ヨーロッパ大陸では実存主義、マルクス主義、英米では言語分析哲学、という三つの潮流に分かれて、現代哲学が続きます。

●先生はフッサールがご専門ですね？

はい。フッサールは、ユダヤ系ドイツ人の哲学者(現象学者)で、哲学史の流れで言えば、20世紀の実存主義哲学者たちの師匠です。フッサールは、晩年にナチスによって大学への立ち入りを禁止されるなど大変な目に遭いますが、生涯を通じて4万枚もの草稿を残しています。それは、フッサールの死の直後にベルギーの神父によって運び出され、今日では、ベルギーのルーヴァン・カトリック大学附属フッサール・アルヒーフに保管されています。私は、ドイツ留学中、そうした膨大な資料に接して貴重な資料

を収集しました。現場のエートス(空気)に触れたことは、その後の私の研究の財産となりました。

哲学は、フッサールの時代あたりから、なまなましい生きた人間を主題化するようになり、そこに汲めども尽きぬ醍醐味があって面白いのです(笑)。

●教育のポリシーは？

高専で技術者を目指す学生の人間性の育成を担うのが、哲学や倫理の役割です。問題意識をもって深く考え、人間形成の糧にしてもらいたい、という思いです。コミュニケーション力を向上させて欲しいという産業界からの強い要望もあり、授業では学生の考えを引き出すように教師と学生の間で会話のキャッチボールをしながら楽しく展開しています。敬愛する高名の現象学者木田元先生は、難しい事を噛み砕いて平易にするのがプロだと仰っていましたが、実にその通りだと思います。(写真と文/安部博文)

【堀栄造(HORI Eizo)プロフィール】

▼1956年、熊本県阿蘇市の生まれ。一人っ子だったため、両親によって大切に育てられる。小学校低学年から作文が好きで、中学校時代は漱石など近代日本文学に惹かれる。高校の倫理の教師を通じて人間探究の学としての西洋哲学を知る。▼熊本県外には出さないという親の方針に従い、1975年、熊本大学法文学部哲学科に入学。1年次からカントやヘーゲルを読み、教員と議論を重ねる。4年次にフッサールの最晩年の書『ヨーロッパの諸学の危機と超越論的現象学』の翻訳書を読んだのが、フッサールとの初めての出会い。▼1979年、学部卒業と同時に結婚し、熊本大学大学院へ進学。学習塾の講師や家庭教師を務めながら、哲学を学ぶ。▼1981年、修士課程を修了したが、フッサール研究への思いは強まるばかりだったので、東京へ出て哲学修行を行うための下準備を進める。▼1985年、筑波大学大学院五年一貫博士課程哲学・思想研究科へ進学。東大に勝るとも劣らない伝統のエートス(空気)に触れて、「一流とはこれだ!」と確信。塾講師と家庭教師で生活費を捻出しながら、フッサールの研究で名高い木田元が主宰する勉強会にも参加。木田元を通じてフッサールの研究者であるF.フェルマンの著書『現象学と表現主義』(木田元訳)を知る。▼1990年、博士課程を単位取得満期退学。同年4月、大分工業高等専門学校の哲学担当教員として着任。▼1994年4月から1年間、ドイツのミュンスター大学へ留学。ケルンのフッサール・アルヒーフへ足繁く通う。▼1997年、フェルマンの著書の翻訳書『生きられる哲学—生活世界の現象学と批判理論の思考形式』(法政大学出版局)を出版。▼1998年に筑波大学で学位請求論文が一応水準に達していると言われたものの、修正に修正を重ね、2006年、筑波大学で学位取得。博士(文学)。▼『フッサールの現象学的還元—1890年代から「イデー I」まで』(晃洋書房、2003年)、『フッサールの脱現実化的現実化』(晃洋書房、2006年)を出版。「前・中期の研究を終え、これから後期の研究を仕上げる。」と語る。

